

初年次教育の実態把握と 内容の検討に向けた基礎的研究

新美 尚行¹・川脇 慎也¹
天龍 洋平²

I 緒 言

日本の高等教育機関における初年次教育科目が注目を集め始めたのは、2000年代半ばのことである。文部科学省において初年次教育は「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの」¹⁾と位置付けられ、2008年時点における全国の大学の82% (595大学) が初年次教育を実施していることが明らかになっている。また、2022年時点においては98% (744大学) まで実施率は増加²⁾しており、このような普及の背景には、学生の学力や動機の多様化、高等教育政策の変化、社会からの教育効果の提示要求などがあると指摘されている³⁾。

2008年時点での初年次教育の内容は①「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」が84.87% (505大学) の割合となっており、次いで②「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム」が75.46% (449大学)、③「学問や大学

¹ 九州国際大学現代ビジネス学部

² 新潟県立大学国際経済学部

教育全般に対する動機付けのためのプログラム」が75.12%（447大学）の割合で盛り込まれていた¹⁾。2022年時点においても上位3つのプログラムは同様の内容であったが、その割合はそれぞれ①91.6%、②85.6%、③83.9%と増加し、その他のプログラムの割合も増加傾向を示していた²⁾。初年次教育の目的は、当初は学生の学力低下や動機の低下への対処、中退率の低下などが主なものであった。しかし、現在では、学生の多様化への対応、教育改革の一環、FD（ファカルティ・ディベロップメント）としての有効性、学力格差や動機の格差の拡大への対処など、より幅広い目的が付加されている³⁾。また、2010年の大学設置基準の改正により、教育課程内外を通じた「社会的・職業的自立に向けた指導等（キャリアガイダンス）」が制度化されたことにより、以降は初年次教育の中にキャリア教育の要素が組み込まれ、学生の社会的・職業的自立を支援する取り組みといったキャリア教育が初年次教育と密接な関係を持ち始めたことが指摘されている^{3,4)}。

初年次教育の内容は、時代とともに多様化・高度化し、実施形態においても授業形式だけでなく、オリエンテーションやガイダンス、合宿やオリエンテーションキャンプなど、正課外のプログラムも取り入れられ多様化が進んでいる⁴⁾。筆者らが所属する（第三筆者は旧所属）九州国際大学現代ビジネス学部地域経済学科（以下、本学科）においても、初年次教育の一環とした授業外での研修や、初年次教育の科目として配置されている「入門セミナー」が通年科目として開講されている。2017年度の新学部設立1年目の本学科における入門セミナーは、授業計画におけるねらいや達成目標、評価基準は統一されていたものの、授業の進め方やその内容は教員の裁量に任されていたことからクラスによって進捗状況にばらつきが生じ、学生の基礎力の習得度合いに差が生じていることが課題として挙げられた。そこで入門セミナーの授業計画の見直しとともにテキストを作成することが提案された。当初は市販のテキストを利用する案も出されたが、本学の学生の状況に合った内容にしたほうが良いとの思いから学科に所属する教員（当時の教務委員と科目担当幹事）を中心としてテ

キスト作成が行われ、学科全体として学習の進捗状況を一定化し、学習内容の質の保証を図った⁵⁾。

以降、本学科の入門セミナーの内容は、当時作成されたテキストをベースに新入生の状況を踏まえた内容の検討・構成がなされているが、先述してきた通り、初年次教育にて対応すべき内容は多様化し、常に変化する（した）社会・学生への対応が科目レベルにおいても求められている。科目レベルにおいては、限られた時間にてこの多様さへ対応が求められることから、今後はより一層内容の精査が必要となる。そこで本研究においては、現在の初年次教育の状況について把握・整理し、各大学のシラバスに着目した分析を通して学生の実情（特に偏差値レベル）に即した授業内容の検討に向けた基礎的資料を得ることを目的として調査を実施した。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象

九州・沖縄地区内の4年制私立大学49大学のうち、文部科学省「令和6年度学校基本調査」、「学科系統分類表」⁶⁾における「社会科学」に該当する27大学59学科の初年次教育・大学教育導入科目を対象とした。

2. 分析方法

2.1 科目の位置づけと内容の確認

分析においては対象学科の公開されているシラバスの科目名および記載内容から、初年次教育科目や大学教育への導入科目に位置づけられていることを確認した。また、シラバスのみでの判断が難しい場合には公開されているカリキュラムマップなどから科目の位置づけを確認した。

2.2 分析対象

対象となる59学科の内、該当科目がない場合や、公開されているシラバスの詳細な内容が不明である科目は分析の対象から除外し、23大学43学科の初年次教育・大学教育導入科目を分析対象とした。

2.3 分 析

分析ではシラバスに記載されている内容を確認するが、より丁寧な内容把握を目的とし、一回の授業につき複数の授業内容が記載されている場合であってもその内容すべてを抽出し、内容及び扱われる回数（頻度）を確認した。なお、記載の表現は異なるが、同様の内容である場合は同一内容として表記を統一して抽出をした。また、各学科の傾向と特徴を把握することを目的とし、授業開講時期、偏差値帯別にて比較を行った。なお、偏差値はベネッセ⁷⁾を参考にした。統計的解析においては、 t 検定を実施し、以上の分析にはIBM SPSS Statistics Ver.29を適用し、有意水準は5%とした。

Ⅲ 結 果

1. 調査対象学科の各種状況と開講時期

対象となる学科の各種状況は表1のとおりである。本調査対象における初年次教育科目の開講時期は通年実施が大半を占めた（前期：32.6%、通年：67.4%）。また、開講時期別に入学生員及び偏差値を比較したところ、ともに前期開講学科が通年学科に比して高い数値を示し、入学生員においては有意差（ $t(41) = -1.78, p = .083$ ）が確認された（表2）。

表1 対象学科の各種状況と開講時期

項目	平均値	標準偏差	中央値	最大値	最小値
入学生員	154.29	105.65	117.50	470	50
偏差値	45.67	3.66	44.00	56	41

表2 開講時期と開講時期別の各種状況

項目	前期		通年		t値
	n = 14	32.60%	n = 29	67.40%	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
入学定員	194.29	149.97	132.29	69.84	1.78 ***
偏差値	47.79	4.42	44.46	2.79	2.832

*** $p < .001$

2. シラバス記載内容と領域

シラバスの内容を確認したとこと54の内容が抽出された。これらの内容について、国立教育政策研究所が2007年に実施した「大学における初年次教育に関する調査」にて分類した8つの領域、すなわち、(1)スタディ・スキル系(レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等)、(2)スケジュール・スキル系(学生生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活等)、(3)オリエンテーションやガイダンス(フレッシュマンセミナー、履修案内、大学での学び等)、(4)専門教育への導入(初歩の化学、法学入門、物理学通論、専門の基礎演習等)、(5)教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの、(6)情報リテラシー(コンピュタリテラシー、情報処理等)、(7)自校教育(自大学の歴史や沿革、社会的役割、著名な卒業生の事績など)、(8)キャリア・デザイン(将来の職業生活や進路選択への動機づけ、自己分析等)⁸⁾と、該当しないまたは目的等の判断が難しい(9)その他領域に分けると表3の通りとなった。

表3 シラバスの内容と分類

シラバス内容と分類	
(1) スタディ・スキル系	(4) 専門教育への導入
学修支援のためのツールとその活用方法	専門職理解（歴史など）
図書館の利用について	専門職（分野）の学習
PC・PC アプリの使い方	
学修方法について	(5) 教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの
ノートテイキング	面談
レポートの書き方	学生交流・レクリエーション
ライティングスキル（レポート作成）	宿泊研修
倫理教育	上級生との交流
思考法	卒業生との交流
クリティカルシンキング	コミュニケーション・自己紹介
ロジカルシンキング	基礎学力テスト
プレゼンテーションの方法・準備	
グループワーク	(6) 情報リテラシー
プレゼンテーション	情報リテラシー
マインドセット	情報の収集
試験に向けて	情報の分析
主張と反論の仕方	
レジュメ作成	(7) 自校教育
小論文作成	建学の精神・大学の歴史について
リーディングスキル	学部・学科・コース・ゼミについて
アカデミックスキル	行事・大学祭について
まとめ・振り返り・自己評価	
(2) スチューデント・スキル系	(8) キャリア・デザイン
同和教育	キャリア教育
救命講習	学外訪問
社会人基礎力	ジェネリックスキルテスト
学生生活の心得（マナー）	適性検査
ハラスメント・デート DV 予防	学外実習
学内案内	
ジェンダーリテラシー	(その他)
自由裁量	外部講師講演
	自由裁量
(3) オリエンテーションやガイダンス	
ガイダンス・オリエンテーション	
留学について	
履修指導・説明・登録	

3. シラバス記載内容（開講時期別）

抽出された内容について、開講時期別にその頻度を確認した結果、前期開講学科で最も多く記載されていた内容は「専門職（分野）の学習」（21回、9.42%）であり、次いで、「レポートの書き方」（17回、7.62%）、「プレゼンテーション」「情報の収集」（16回、7.17%）であった。領域では「スタディ・スキル系」が102回（45.74%）と最も多く、次いで、「教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの」が26回（11.66%）、「専門教育への導入」が21回（9.42%）となった（表4）。

表4 授業内容とその頻度（前期開講学科）

前期 (n=14)					
内容	合計頻度	全体に占める割合(%)	内容	合計頻度	全体に占める割合(%)
(1) スタディ・スキル系	102	45.74	(4) 専門教育への導入	21	9.42
レポートの書き方	17	7.62	専門職（分野）の学習	21	9.42
プレゼンテーション	16	7.17	専門職理解（歴史など）	0	0.00
まとめ・振りかえり・自己評価	15	6.73	(5) 教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの	26	11.66
リーディングスキル	11	4.93	コミュニケーション・自己紹介	10	4.48
グループワーク	9	4.04	面談	9	4.04
PC・PCアプリの使い方	7	3.14	学生交流・レクリエーション	6	2.69
ライティングスキル（レポート作成）	7	3.14	上級生との交流	1	0.45
図書館の利用について	6	2.69	宿泊研修	0	0.00
プレゼンテーションの方法・準備	6	2.69	卒業生との交流	0	0.00
学修支援のためのツールとその活用方法	2	0.90	基礎学力テスト	0	0.00
ノートテイキング	2	0.90	(6) 情報リテラシー	20	8.97
思考法	2	0.90	情報の収集	16	7.17
試験に向けて	1	0.45	情報の分析	4	1.79
小論文作成	1	0.45	情報リテラシー	0	0.00
学修方法について	0	0.00	(7) 自校教育	8	3.59
倫理教育	0	0.00	学部・学科・コース・ゼミについて	5	2.24
クリティカルシンキング	0	0.00	建学の精神・大学の歴史について	3	1.35
ロジカルシンキング	0	0.00	行事・大学祭について	0	0.00
マインドセット	0	0.00	(8) キャリア・デザイン	11	4.93
主張と反論の仕方	0	0.00	キャリア教育	8	3.59
レジュメ作成	0	0.00	ジェネリックスキルテスト	2	0.90
アカデミックスキル	0	0.00	学外訪問	1	0.45
(2) スチューデント・スキル系	16	7.17	適性検査	0	0.00
学内案内	11	4.93	学外実習	0	0.00
学生生活の心得（マナー）	5	2.24	(9) その他	0	0.00
同和教育	0	0.00	外部講師講演	0	0.00
救命講習	0	0.00	自由裁量	0	0.00
社会人基礎力	0	0.00			
ハラスメント・デートDV 予防	0	0.00			
ジェンダーリテラシー	0	0.00			
(3) オリエンテーションやガイダンス	19	8.52			
ガイダンス・オリエンテーション	11	4.93			
留学について	4	1.79			
履修指導・説明・登録	4	1.79			

通年開講学科で最も多く記載されていた内容は「プレゼンテーション」(61回、8.85%)であり、次いで、「プレゼンテーションの方法・準備」(58回、8.42%)、「グループワーク」(53回、7.69%)であった。領域では「スタディ・スキル系」が425回(61.68%)と最も多く、次いで、「教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの」が63回(9.14%)、「スチューデント・スキル系」が44回(6.39%)となった(表5)。なお、本学科は通年開講学科に該当している。

表5 授業内容とその頻度(通年開講学科)

通年 (n=29)					
内容	合計頻度	全体に占める割合(%)	内容	合計頻度	全体に占める割合(%)
(1) スタディ・スキル系	425	61.68	(4) 専門教育への導入	13	1.89
プレゼンテーション	61	8.85	専門職(分野)の学習	11	1.60
プレゼンテーションの方法・準備	58	8.42	専門職理解(歴史など)	2	0.29
グループワーク	53	7.69			
レポートの書き方	48	6.97	(5) 教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの	63	9.14
まとめ・振り返り・自己評価	44	6.39	コミュニケーション・自己紹介	14	2.03
ライティングスキル(レポート作成)	39	5.66	宿泊研修	12	1.74
リーディングスキル	36	5.22	面談	10	1.45
アカデミックスキル	25	3.63	学生交流・レクリエーション	10	1.45
図書館の利用について	9	1.31	基礎学力テスト	9	1.31
倫理教育	8	1.16	上級生との交流	5	0.73
PC・PCアプリの使い方	8	1.16	卒業生との交流	3	0.44
学修方法について	6	0.87			
レジュメ作成	6	0.87	(6) 情報リテラシー	11	1.60
思考法	4	0.58	情報の収集	8	1.16
ロジカルシンキング	4	0.58	情報リテラシー	2	0.29
主張と反論の仕方	3	0.44	情報の分析	1	0.15
ノートテイキング	3	0.44			
小論文作成	2	0.29	(7) 自校教育	18	2.61
試験に向けて	2	0.29	学部・学科・コース・ゼミについて	11	1.60
学修支援のためのツールとその活用方法	2	0.29	建学の精神・大学の歴史について	5	0.73
マインドセット	2	0.29	行事・大学祭について	2	0.29
クリティカルシンキング	2	0.29			
(2) スチューデント・スキル系	44	6.39	(8) キャリア・デザイン	42	6.10
学生生活の心得(マナー)	27	3.92	キャリア教育	27	3.92
学内案内	6	0.87	学外実習	8	1.16
同和教育	3	0.44	適性検査	3	0.44
ハラスメント・デートDV予防	3	0.44	ジェネリックススキルテスト	2	0.29
救命講習	2	0.29	学外訪問	2	0.29
社会人基礎力	2	0.29			
ジェンダーリテラシー	1	0.15	(9) その他	30	4.35
			外部講師講演	29	4.21
(3) オリエンテーションやガイダンス	43	6.24	自由裁量	1	0.15
ガイダンス・オリエンテーション	34	4.93			
履修指導・説明・登録	8	1.16			
留学について	1	0.15			

4. シラバス記載内容（偏差値帯別）

偏差値帯の違いと授業内容との関係性を明らかにする目的から、本調査対象の偏差値の平均値まで（41－45）の学科（以下、下群）と平均値を上回る（46－56）学科（以下、上群）とでシラバス記載内容および領域について比較を行った。なお、比較の際は本学科の今後の授業内容の検討に向け、通年開講学科を対象とし、特に偏差値帯の違いで差を認めた領域及び内容を中心に記述した（表6）。なお、本学科は偏差値41の下群に属している。

表6 偏差値帯別の比較

内容	偏差値帯				t値
	41-45 (n=19)		46-56 (n=10)		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
(1) スタディ・スキル系					
PC・PCアプリの使い方	0.16	0.38	0.50	1.27	-1.10 **
学修方法について	0.32	0.75	0.00	0.00	1.32 **
ノートテイキング	0.16	0.38	0.00	0.00	1.32 **
レポートの書き方	2.16	3.08	0.70	0.95	1.45 *
思考法	0.00	0.00	0.40	1.27	-1.40 **
試験に向けて	0.11	0.32	0.00	0.00	1.05 *
(2) スチューデント・スキル系					
救命講習	0.11	0.32	0.00	0.00	1.05 *
学内案内	0.26	0.45	0.10	0.32	1.01 *
(3) オリエンテーションやガイダンス					
留学について	0.00	0.00	0.10	0.32	-1.40 **
履修指導・説明・登録	0.42	1.07	0.00	0.00	1.23 **
(4) 専門教育への導入					
専門職理解（歴史など）	0.00	0.00	0.20	0.63	-1.40 **
(5) 教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの					
学生交流・レクリエーション	0.47	0.96	0.10	0.32	1.18 **
上級生との交流	0.26	0.65	0.00	0.00	1.26 **
コミュニケーション・自己紹介	0.63	0.76	0.20	0.42	1.66 **
(7) 自校教育					
建学の精神・大学の歴史について	0.26	0.73	0.00	0.00	1.13 *
学部・学科・コース・ゼミについて	0.58	0.96	0.00	0.00	1.89 ***
(8) キャリア・デザイン					
学外訪問	0.00	0.00	0.20	0.63	-1.40 **
ジェネリックスキルテスト	0.11	0.32	0.00	0.00	1.05 *
(9) その他					
外部講師講演	1.42	2.48	0.30	0.67	1.39 *
	1.37	2.50	0.30	0.68	1.32 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

算出した平均値について t 検定を実施した結果、シラバス記載内容では19項目にて有意差が確認され、そのうち、「PC・PC アプリの使い方」($t(27) = -1.10, p = .027$)、「思考法」($t(27) = -1.40, p = .172$)、「留学について」($t(27) = -1.40, p = .172$)、「専門職理解(歴史など)」($t(27) = -1.40, p = .172$)、「学外訪問」($t(27) = -1.40, p = .172$) の5項目は下群に比して上群が高い数値を示した。

領域では「(7) 自校教育」($t(27) = -2.32, p = .028$)、「(9) その他」($t(27) = 1.32, p = .175$) にて有意差が確認され、いずれも上群に比して下群が高い数値を示した。

IV 考 察

本調査対象においては、開講時期に関わらず「スタディ・スキル系」の内容が多く実施(前期:45.74%、通年:61.68%)されており、特に通年開講学科では幅広い内容(22項目)が設定されていた。また、「教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの」の内容も共通して「スタディ・スキル系」に次ぐ高い割合(前期:11.66%、通年:9.14)を示している。これは、山田⁹⁾による2017年度初年次教育学会員を対象とした調査結果報告と同様の傾向であった。

一方、開講期別の比較では前期開講学科において「専門教育への導入」が高い割合を占めていることや、各領域が通年開講学科に比して万遍なく設定されている点に傾向の違いを確認することとなった。「専門教育への導入」についての内容が記載されていた学科には社会福祉系学科や情報系学科が含まれており、これらの学科においてはその特性上、取得が目指される資格や、進路等がある程度明確であることから早期の専門教育への導入を意図した内容が組み込まれていることが推察される。また、通年開講学科にて高頻度で実施されているプレゼンテーションやグループワークは、目的を達成するために多くの時間を割かなければならないことは容易に想像できることから、教授回数を確保で

きる通年開講学科にてその頻度が高まったものと言えよう。河合塾¹⁰⁾によると、定員規模が小規模ほど学生の態度変容（グループ学習、プレゼンなど）への取り組みを行っている傾向がすでに報告されており、本調査においても通年開講学科に比して前期開講学科は入学定員が有意に多いことが影響していると推察される。

偏差値帯別での比較を概観すると、上群に比して下群ほど各領域の基礎的な内容が高頻度で教授されていることが明らかとなった。難易度が高い学部に所属している学生ほど、大学での自律的な学習に親和性のある学習行動にすでに（入学以前に）携わってきており、大学学習へ自律的に携わるスキルや基礎が備わっている一方で、低学力層の学生はこれらのスキルや基礎を身に付けているとは言い難いとの報告³⁾からも、本調査対象においても、下群においては大学生に必要とされる基礎的な各種スキルの教授を目的とした内容が設定されていると考えられる。また、上群では専門職理解や学外訪問といった内容が下群に比して高頻度で実施されており、卒業後の進路を意識した内容を早期に設定していることが明らかとなった。「キャリア・デザイン」に関する内容が正課内での初年次教育として位置づけられてきていることは既に報告⁴⁾されているが、上群ほどその頻度が高いことは先述した大学生に必要とされる基礎的な各種スキルがすでに修得されていることを前提とした内容設定がなされての結果であると推察される。

V 結 語

本研究は、九州地区の4年制私立大学を対象として、各大学のシラバス分析より、現在の初年次教育の状況について把握・整理し、偏差値レベルに即した授業内容の検討材料を得ることを目的として調査を実施した。

本調査対象の初年次教育における教授内容の全体傾向としては、（1）プレゼンテーションやグループワーク、レポートの書き方といった「スタディ・ス

キル系」の内容が高頻度で実施されていること、(2) 開講期別では前期開講学科において「専門教育への導入」が高頻度で実施されていること、及び、開講期の違いにより若干の傾向の差が見て取れること、(3) 偏差値帯別では下群ほど各領域の基礎的な内容が高頻度で教授されていることが明らかとなった。初年次教育においては各大学の入学生の状況または目指すべき学生像に即した内容が設定されていることがうかがわれ、ごく少数ではあるがジェンダーリテラシーといった社会の多様化に合わせた内容も組み込まれつつあり、より初年次教育における教授内容の範囲の広がりが見て取れた。

ただし、上述した結果は公開されているホームページより検索し得ることのできたシラバスに基づき、記載されている内容とその頻度から分析及び考察を施していることからいくつか注意すべき点がある。例えば、2012年度の調査報告¹¹⁾では、リメディアル教育に分類される「高校補習」の内容が2001年調査の2.0%から28.8%に増加していることが指摘されているが、本調査においては意図を含めた内容の詳細までは把握することが出来ず、リメディアル教育を目的とした内容設定の把握はできていない。また、同一の内容を多く教授していることが必ずしもその内容の「重み」を示しているとは限らず、授業設計者や授業担当者が何を重視しているのかといった意図を適確に理解することは困難であった。

したがって、限られたサンプルから得られた限定的な結果であることから本結果を一般化するにはより多くの大学を対象として調査を実施する必要がある。また、今後はヒアリング調査を通して意図を含めた内容の適切な把握を行い、今後の授業内容検討に向けた更なる資料収集をしたい。

付 記

本論文は、2024年度社会文化研究所共同研究費の助成を受けて行った研究成果の一部である。

文 献

- 1) 文部科学省 (2010) 大学における教育内容等の改革状況について (平成20年度)。
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/___icsFiles/afieldfile/2010/05/26/1294057_1_1.pdf、(参照日 2025年 1月23日)。
- 2) 文部科学省 (online) 大学における教育内容等の改革状況について (令和4年度)。
https://www.mext.go.jp/content/20241011-mxt_daigakuc01-000038093_1.pdf、
(参照日 2025年 1月23日)。
- 3) 山田礼子 (2012) 大学の機能分化と初年次教育：新入生像をてがかりに。日本労働研究雑誌 No. 62912月号、pp. 31-43。
- 4) 西野毅朗 (2016) 日本における初年次教育導入過程の再考—大学設置基準の大綱化以前に焦点を当てて—。初年次教育学会誌、第8巻第1号。
- 5) 川脇慎也・天龍洋平・新美尚行 (2025) 初年次教育用テキスト作成の事例報告。教養研究、第31巻2号。(投稿中)
- 6) 文部科学省 (online) 令和6年度学科系統分類表。
https://www.mext.go.jp/content/20241001-mxt_chousa01-000034363_18.pdf、(参照日 2024年10月21日)。
- 7) Benesse マナビジョン (online) 大学の偏差値一覧から調べる。
<https://manabi.benesse.ne.jp/daigaku/hensachi/>、(参照日 2024年10月21日)。
- 8) 川島啓二 (2008) 初年次教育の諸領域とその広がり。初年次教育学会学会誌第1巻第1号、pp. 26-32。
- 9) 山田礼子 (2018) 2017年度初年次教育学会会員調査結果から—3つのポリシーと初年次教育の関係を中心とした分析—。初年次教育学会学会誌第10巻第1号、pp. 89-98。
- 10) 学校法人河合塾教育研究部 (2009) 2008-2009年度初年次教育調査報告書 (要約版)。
https://www.kawaijuku.jp/jp/research/unv/pdf/report_education.pdf、
(参照日 2025年 1月10日)。
- 11) 田中亜裕子 (2014) 初年次教育の広がりと大学の属性との関係。教育総合研究叢書7号、pp. 13-28。

